禪の友

Zen no Tomo

February 2024

2

ご本山だより
大本山永平寺【雪作務】

「永平寺の雪かきはさぞ大変でしょう」

ご参拝にお越しの皆さんからよく言われる言葉です。確かに大変です。二月になると、永平寺では沢山の雪が降ります。特に、伽藍の屋根はどれも大きく、そこから大量の雪が落ちてきます。それらは人の背よりも高く積もり、時には回廊の屋根をも越えるほどになります。

ただでさえ広い境内です。多くの場所は重機が入ることができません。すべて人力で雪かきをしなければならないのです。仮に、この作業を一人でするとなれば為す術もなく、ただ呆然とするしかないかもしれません。しかし永平寺には多くの仲間がいます。同じ釜の飯を食べ、切磋琢磨している仲間です。なによりも、仏道を求めんと志を同じくした仲間たちです。仲間がいるからこそ、困難な作業も勤め励むことができます。こうして雪かきという大変な作業が、雪作務という大切な修行となるのです。

このような力のことを「大衆の威神力」という言葉で表すことがあります。仏道修行に励む僧侶たちが、一致団結することで生まれる仏や菩薩の力といった意味です。この言葉の出典は分かりませんが、同様の言葉を瑩山禅師は『瑩山清規』の中で「衆僧威神之力」と記されています。また、道元禅師も『教授戒文』の中で「僧は勝友なるがゆえに帰依す」と記され、仏道修行に共に励む仲間は勝れた友であると仰っているのです。釈尊は『雑阿含経』の中で「善き友をもち、善き仲間の中にあるということは、聖なる修行のすべてであると知ることができる」と仰っています。

よき仲間たちがいるからこそ、諦めることなく修行に励んでいけるのです。そのことを雪作務は教えてくれます。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一

ご本山だより

大本山總持寺【節分追儺式と涅槃会】

本来、節分とは季節の節目である「立春、立夏、立秋、立冬の前日」のことをいい、年に四回あります。ところが、旧暦では春から新しい年が始まったため、立春の前日の節分（二月三日頃）は、大晦日に相当する大事な日でした。そこで、立春の前日の節分が重要視され、節分といえばこの日をさすようになったのです。昔は、季節の分かれ目、特に年の分かれ目には邪気が入りやすいと考えられており、様々な邪気祓い行事が行われてきました。おなじみの豆まきも、新年を迎えるための邪気祓い行事です。

古代中国では、大晦日に「追儺」という邪気祓いの行事がありました。これは、桃の木で作った弓矢を射って、鬼を追い払う行事です。これが平安時代に宮中行事として取り入れられました。

その行事のひとつ「豆打ち」の名残が「豆まき」で、江戸時代に庶民の間に広がりました。本来は大晦日の行事でしたが、旧暦では新年が春から始まるため、立春前日の節分に行われるようになりました。

總持寺では四年振りに二月三日にこの節分追儺式を年男、年女、著名人をお迎えし盛大に行うことになりました。未だ新型コロナ感染症は終息の域には達しておりませんが、感染対策を念頭に置き、勤めることになります。

また、二月十五日は、お釈迦さまのご命日である「釈尊涅槃会」があります。大きな涅槃図を掲げて色とりどりの涅槃団子をお供えし、禅師さまの御親修で法要が執り行われます。

それに因み二月十二日から十四日までは僧堂で「報恩摂心」が修行されます。

この行事が終わると、修行僧は一定の節目を付けて出身地へ帰ることになるのが鶴見の風物詩なのです。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

すがれ虫汝は恋を遂げざるや

島根県　藤江　尭

評　「すがれ虫」とは、鳴く虫の盛りの季節を過ぎてもほそぼそと鳴く虫のこと。この虫は恋をすることが適わずに悲しく鳴いているのだろうか。こんな優しい心情を持つ作者。こんなものは日本人にしかない感性なのではなかろうか。

しぐるるや「松本楼」に駆け込みし

神奈川県　堀田　耕一

評　「松本楼」とは東京の日比谷公園の中にある西洋料理屋。カレーライスが有名でその歴史も古いらしい。時雨に降られて足早に駆け込むのもどこか日本映画の映像めきて味がある。これが夕立とかでは慌ただしくて様にならない。

◆口尖らせて糸針通す夜寒かな　東京都　鈴木　英治

◆見ゆること全てにあらず冬銀河　長野県　森山　昌子

◆黄落や虚構の街を遠く見る　東京都　守屋　栄子

◆初霜や庭に忘れし花鋏　埼玉県　橋本　永子

◆兄からの冬帽弟に深し　東京都　松本　キヌヱ

◆指の間をこぼるる記憶木の葉髪　大阪府　柏原　才子

◆寒昴（かんすばる）歌ひし人の逝きにけり　神奈川県　佐野　勇

◆襖絵に見入られてゐる夜ぞ長き　北海道　中西　千晶

◆ご機嫌をとるカメラマン七五三　静岡県　石濵　徹

◆濁り酒ちあきなおみの赤とんぼ　千葉県　甲斐　勇

選者吟

ため息も白き破綻の恋みくじ

俊樹

作句小見　これは「息白し」という季題を分解した。恋みくじの結果が惨憺たるものだった。そのため息も落胆の気持も俳句になるのである。でもこれは私自身のことではない。多分どこかの神社の境内でそんな女の子が居たのを見て作ったのかと思う。

曹洞宗 歌壇

選・長澤 ちづ

夕焼けにほほ染め歩む公園に初雪知らす
雪虫の舞ふ

北海道　加藤 智子

評　雪虫がとぶと初雪が降る日も近いらしい。季節のはざまを詠い、夕日と白い雪虫との色の対比も美しい一首。この秋は温暖化の所為か、雪虫が大発生をした地域もあったとか。風物詩としての雪虫も受け止め方が変わってゆくようだ。

去年の秋道に拾ひし栗ひとつ棚にあるまままた秋が来ぬ

岐阜県　後藤 進

評　去年（こぞ）の秋からこの秋への時の流れを捉え方に無理がなく自然で多くの人を頷かせるだろう。「棚にあるまま」の栗は何を象徴しているのだろうか、そんなことも思わせる。

◆幼子に茶髪のパパが焼香をやって見せるはママの三回忌
静岡県　末松 愛正

◆二歳半逆縁の子の落書きを消せずに生きる母の人生
秋田県　髙橋 カツ子

◆忘れない臨終の父に合掌し涙を見せた過疎地の医師を
山口県　濱田 道子

◆夫在らば共に泣きしとひとり観る戦艦武蔵最期の映像
静岡県　杉原 民子

◆鎌握る力ある身のうれしくて技を整え冬囲いする
愛知県　深谷 ハネ子

◆ままごともあかのまんまも稀少となり赤とんぼも見ず空だけ青い
兵庫県　前田 あつ子

◆をちこちに田仕事の煙立ちあがり足早となる集落の冬
大阪府　柏原 才子

◆雪しずる音のみ聞こゆる座禅堂凍つる空気が肌を突き差す
鳥取県　眞山 博充

◆蟋蟀の声仄かにて床を出で窓を小開けてしみじみと聞く
島根県　宮廻 恒雄

◆つわぶきの黄色しずかに照りかえし友待つ門辺に明るさ灯す
鳥取県　徳本 義則

選者詠

天上に藍染めの甕のぞく神いませるごとしうす青き空

ちづ

作歌小見　末松さんの一首の結句には胸を衝かれました。感情を入れずに詠まれ作者の思いが籠ります。次の髙橋さんは逆縁の子の落書きを消せぬまま老いてゆく母が詠われます。生死のことは人の思慮を越えたところに在り、只々祈るのみです。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。